くらしナビ・医療

ＲＳウイルスワクチン　赤ちゃんのため、妊婦が接種

その他 2024 年 4 月 24 日 (水)配信　毎日新聞社

生まれてくる赤ちゃんを感染症から守るため、妊婦がワクチン接種を受ける――。母体から胎児へ抗体が移行する「母子免疫」の仕組みを生かしたワクチンが１月に国内で初めて承認された。妊婦が自分の身を守るためのものと異なる新しいワクチンは、どのようなものなのか。

●肺炎予防効果を期待

今回承認されたのは、米ファイザー社製のＲＳウイルスワクチン「アブリスボ筋注用」。米国や欧州では一足早く昨年８月に承認された。妊娠２４～３６週の妊婦に０・５ミリリットルを１回、筋肉注射することで、ＲＳウイルスを原因とする新生児や乳児の肺炎、気管支炎の予防効果が期待される。

ＲＳウイルスに感染すると、４～６日間の潜伏期間を経て、発熱、鼻水、せきなどの症状が出る。接触や飛沫（ひまつ）によって広がり、国立感染症研究所によると、１歳になるまでに半数以上、２歳になるまでにほぼ全員が感染するという。特に生後６カ月未満で感染すると重症化リスクが高まり、月齢別の入院数は生後１～２カ月が最も多い。

特効薬はなく、国内では重症化を防ぐために体内でウイルスと結びついて増殖を抑える「中和抗体薬」が使われてきた。ただ、対象は先天性心疾患などの持病がある子どもや、免疫力が低い早産児らに限られる。

ＲＳウイルス感染症は月齢が低いほど重症化する恐れが高まることから、母子免疫ワクチンの承認は全ての乳幼児を守る有効な手段になることが見込まれている。

●「母子免疫」利用

では妊婦に接種されたワクチンは、どのようにして子どもを守るのか。

妊婦が接種を受けると体内で中和抗体が作られ、胎盤を通じて胎児へ移る。「生後半年ごろまでは母体からもらった免疫に守られる」という、人類に元々備わった母子免疫の働きを利用する仕組みだ。

妊婦にはウイルスを弱毒化して作られる「生ワクチン」は接種できないが、毒性のないウイルスの一部を使ったワクチンなどは使用可能で、アブリスボはこの一種となる。

海外では、１０年以上前から妊婦へのワクチン接種による乳児の感染症対策が取られている。生後３カ月未満の乳児が感染すると、重症化や死亡のリスクが高まる「百日ぜき」の予防はその一例だ。英国では２０１２年に新生児の感染が増えたためにワクチン接種を推奨し、１年間で６割の妊婦が接種を受けた。ワクチン接種後の妊婦から生まれた生後３カ月未満の乳児の感染報告は、接種を受けていない妊婦から生まれた乳児に比べ、９割抑えられた。

アブリスボの臨床試験には、日本を含む１８カ国の妊婦（妊娠２４～３６週）約７４００人が参加。７１２６人の赤ちゃんについて評価した。ＲＳウイルスによる重度の肺炎や気管支炎の発症について、ワクチン接種を受けた集団は偽薬（プラセボ）を接種した集団と比べて生後９０日で８１・８％、生後半年で６９・４％減らすことができた。また、肺炎や気管支炎を発症し、医療機関の受診が必要となったケースはいずれも半減した。

●６月にも接種可能に

接種は妊娠２８～３６週に受けた場合に有効性が高い傾向にあり、添付文書はこの期間に接種を受けることが望ましいとしている。既に使われている米国では妊娠３２～３６週、欧州では妊娠２４～３６週での接種が推奨されてい

る。

安全性について、注射部位の痛みが４０・６％報告され、プラセボを接種した集団の４倍程度だったが、いずれも軽症から中等度だった。疲労や頭痛などの全身反応や早産、その他の有害事象は両集団で有意差はなく、生まれた子どもの発育遅延や他の有害事象が出た頻度も同様だった。

妊婦の新たな選択肢となるアブリスボは６月にも接種が可能になる見通しだ。横浜市立大学病院の倉沢健太郎・周産期医療センター長は「妊婦には（薬の服用やワクチン接種など）さまざまなためらいがあるが、『ワクチンの必要性について知らなかった』『打てば良かった』となることは避けたい。希望する妊婦が接種を受けられるよう、体制整備を進めていかないといけない」と語った。【金秀蓮】

https://www.m3.com/news/general/1205753?dcf_doctor=true&portalId=mailmag&mmp=MD240424&dcf_doctor=true&mc.l=1029069133&eml=c0a3d6c192a1965e272e4b8586e73c93